8月18日　ヨハネによる福音書8章1～11節

「あなたを罪に定めない」

今日の個所の内容は、イエス様を信じる人が増えて、ファリサイ派の人々が危機感を抱いてる様子から始まっています。オリーブ山からエルサレムに戻ってきたイエス様が見たのは、イエス様を試そうと罪人を連れてきた、その律法学者やファリサイ派の人々でした。

ここで連れてこられた罪人は現行犯逮捕された姦淫の罪を犯した人物でした。ファリサイ派の人々はこの女性をイエス様の前に連れてきて、イエス様がどのような判断をするのかを見定めようとしていました。

しかしイエス様が返したのは沈黙と、「あなたがたの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」という、思いもよらない言葉でありました。最終的に、集まった人々はこの女性を裁くことができるほどに清廉潔白ではなく、彼女を裁く人は誰一人いませんでした。しかし、この状況は女性にとっても困った状況であります。なんせ、彼女は裁かれなければゆるされないのです。誰もがこの女性に石を投げませんが、それで彼女の罪がなくなったわけではなく、罪を背負ったまま生きないといけなくなってしまったのです。

この女性に対して、イエス様は赦しの宣言として「あなたを罪に定めない」と語りかけます。ただの人間の赦しでは動き出すことのできなかった彼女の足が、人間の罪をゆるす神としてのイエス様の言葉によって動くことができるようになりました。

このように、イエス様がゆるす方である、確かに神様であることがここで示されているのですが、そもそも律法の目的は何なのか、という部分に注目したいと思います。律法は、例えばこの女性のように、罪を犯した人に石を投げて殺すことがその目的なのでしょうか。そうではなく、モーセに与えられた律法の目的は「隣人への愛」が土台にありました。だからこそ、隣人愛を実現することが神様の望みであり、その望みをかなえることが神様への愛につながっていくのです。隣人に石を投げて殺そうとした彼らには、神様の正しさではなく、「彼ら自身の正しさ」しかなかったのです。

私たちもまたこの女性のように、自分で償いきれないほどの罪を犯しており、神様の前に出たその時は立ち尽くすしかない存在であります。しかしその罪はゆるされました。罪を犯した事実は消えませんが、罰を受けなくてもいいと、今日の個所の女性と同じように、「罪に定めない」とゆるされ、信仰のもとで自由に振舞うことをゆるされているのです。

同時に私たちは、誰かを裁くことからも解放されています。私たちの罪がゆるされているように、また誰かの罪もゆるされているのです。すべての審きを行うのはただ神様のみであり、私たちが行う必要はありません。私たちはただ、どのような相手に対しても堂々と、悠々と、イエス様のように慈悲深く優しくあればいいのです。「あなたを罪に定めない」とイエス様に声をかけられているからこそ、私たちは無条件に誰かにやさしくすることが出来るのです。

私たちは「裁かれない」という恵みと、「裁くことからの解放」という恵みをイエス様によって与えられています。罪を基準に生きるのではなく、愛を基準に生きることができるようになっているのです。その喜びを胸に、今週一週間の歩みを、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書８章１～11節

- 1:イエスはオリーブ山へ行かれた。朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御もとに寄って来たので、座って教え始められた。そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦淫の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言った。「先生、この女は姦淫をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか。」イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスはかがみ込み、指で地面に何か書いておられた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい。」そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と立ち去ってゆき、イエス独りと、真ん中にいた女が残った。イエスは、身を起こして言われた。「女よ、あの人たちはどこにいるのか。誰もあなたを罪に定めなかったのか。」女が、「主よ、誰も」と言うと、イエスは言われた。「私もあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはいけない。」